■論　文■

地における平和か、天における平和か？ ルカによる福音書 2:14; 19:38 における頌栄句の問題

原　口　尚　彰*

抄　録

天に平和と栄光があるように祈るルカ 19:38 の頌栄句は、天に栄光と地において御心に適う者たちに平和が与えられることを祈る 2:14 と対応する形で挿入されており、そこにははっきりした編集的意図がある。両者は典礼的な讃歌であり、2:14 では天使の群れにより天上から告げられるが、19:38 では地上でイエスの弟子たちの群れが唱える応答唱として歌われている。栄光と平和のテーマは、ルカ福音書の初めと（2:14）後半部に（19:38）出て来ることによって、この物語全体を囲い込む構造となっている。天における栄光の主題は二つの箇所の両方に共通である。平和に関しては、2:14 が地上の平和を願い、19:38 は天上の平和を祈り求めている違いがあるが、両者の間に矛盾はない。天における平和と地上の平和とは相互に相関した主題であり、天上の平和の確立は地上の平和の実現の前提である。イエスは十字架の死と復活によって、この世を支配する死と罪の力に勝利し、神の栄光と平和を天上・地上に顕すことになるのである。

Keywords: ルカ福音書，栄光，平和，天，地

1．問題の所在

ルカ福音書の初めの方に置かれている降誕物語では、ベツレヘムの郊外で羊の群れの番をしていた羊飼いたちに、天からの光が差した後に、天使が彼らに救い主誕生を告げる告知をしている（ルカ 2:11）。その直後に天の大軍が突然出現し、神に栄光を帰し、地上では御心に適う者に平和があることを祈る頌栄句を唱和している（ルカ 2:14）。

他方、福音書物語の後半に描かれているイエスのエルサレム入城を前に、オリブ山を下る弟子の群れが、イエスの到来を讃えると共に、神を讃美して天における平和と栄光を祈り求めている（ルカ 19:38cd; 詩 118[117]:26 を参照）。この讃歌の後半は、降誕物語の際に天の軍勢が歌った讃歌に対応しているが、ルカ 2:14 のように地上における平和が祈り求められるのではなく、天の平和が神の栄光と共に祈願されている。何故このような事

＊ Haraguchi, Takaaki
フェリス学院大学国際交流学部教授
ルーテル学院大学非常勤講師

態になっているかは一つの謎であり、未だに十分に納得の行く説明がなされていない。本論考はこの古くて新しい問題を文学的・神学的視点から解決しようとする試みである。特に、ルカ文書全体の平和の主題の展開の中にこの箇所を置くことによって、この二つの頌栄句が持つ意味を釈義的に解明することとする。

2. 従来の解釈の批判的検証

本件の問題について最も立ち入った考察を行っているのは、H・バーリンクの論文“Die lukanische Redaktion von Lk 19,38 und ihre Deutung,”（「ルカによるルカ 19:38 の編集とその解釈」）である[1]。バーリンクは考察の前提として、ルカ 2:14 と 19:38 の編集史的な分析を行い、福音書記者ルカが 19:38cd において、マルコ原本の「祝福されている、来たるべき私たちの父ダビデの国。いと高きところにホサナ」という句を（マコ 11:10 を参照）、「天に平和そして栄光がいと高きところに」という句に置き換えることによって、ルカ 2:14 と対照させる意図があるとする[2]。

バーリンクによれば、ルカ 2:14 において平和が地上にいる人に対して祈り求められているのに、19:38 では天上の平和が祈り求められているのは、エルサレムの指導者たちのイエスに対する敵対的態度のために、平和が地上から取り去られるからである[3]。それを裏付けるのは、直ぐ後に続く 19:41-44 と 21:20-24 にあるエルサレム陥落の予告の言葉であり、この都に対しては平和でなく戦争と破壊が予告されている[4]。

バーリンクの解釈には以下のような問題がある。第一に、福音書記者ルカが 2:14 と 19:38 を対照させているのは間違いないが、後者が前者の内容を置き換える意図があったのかどうかは明らかではない。ルカ 2:14 の頌栄句は天使の大軍によってなされた讃美の言葉である。それを置き換えたり、内容を変更するような言葉を語ることが出来るのは神や天使たちであって、地上にいる人間ではない。ルカ 19:38 の頌栄句を大声で唱えているのはイエスに従う弟子たちであり、彼らに天使の讃美の言葉の内容を代替するような言葉を語る権威は与えられていない。第二に、地上に平和があるように願うことと天に平和があるように願うことの間に矛盾対立はなく、両者の間には相補的な関係があるのではないだろうか。第三に、ルカ 2:14 において平和が与えられるようにと祈られているのは、「御心に適う人たち」に対してであり、すべての人たちに対してではない。平和の主であるイエスを受け入れず、敵対するような人々は、平和を享受する機会を自ら失う結果となると想定される。従って、ルカ 19:41-44 と 21:20-24 が予告するユダヤ戦争の時のエルサレムの破壊の出来事は、ルカ 2:14 の頌栄句の想定の範囲内であり、その内容を否定するものではない。

G・クラインはE・グレーサーに捧げる献呈論文集の中でこの問題を採り上げ、バーリンクとは対照的な解釈を示している[5]。彼もバーリンク同様に福音書記者ルカは 2:14 と 19:38 を意図的に呼応させていると解釈するが、両者の箇所の内容は相互に矛盾・対立するのではなく相補的であると考える[6]。クラインによると、2:14 において祈り求められている地上の平和はむしろ 19:38 で言及される天上の平和と分かちがたく結び付いている[7]。天上の天使たちが歌う讃歌と弟子たちが唱和する地上の讃歌は、天と地全体にこだましており、宇宙的な規模を持っている[8]。こうしたクラインの解釈は正しい方向にあるが、その論考は非常に簡潔であり、ルカ文書全体における平和の主題の展開の中でこの問題を考察していないし、宗教史的な考察もしていないという限界がある。

3. ルカ文書における平和の主題の展開

新約聖書において平和を表す基本的な言葉はエイレーネー（εἰρήνη）である（マタ 10:34; ルカ 2:14; 12:51; 14:32; 19:38; ヨハ 14:27; 使 7:26; 10:36; 14:2; ロマ 1:7; 5:1; 14:19; Ⅰテサ 1:1; 5:3; エフェ 2:17; 4:3; ヘブ 11:31）。このギリシア語名詞は旧約聖書のギリシア語訳である七十人訳聖書においてヘブライ語シャローム（שלום）の訳語として用いられ、「平和」（民 25:12; 士 4:17; サム上 1:17; 20:42; 29:7;

代上 22:9; 箴 17:1; 詩 122[121]:6, 7, 8; イザ 14:30; 26:3, 12; エレ 6:14; 12:12; 36:11; エゼ 13:10, 16; 34:25）、「平安」（創 15:15; 26:29; サム下 18:28, 29; エレ 41:5）、「繁栄」（士 6:23; サム下 11:7; 代上 4:40; イザ 45:7; エレ 36:11; ダニ 3:98; 詩 35[34]:7, 27）、「救い」（代上 12:18[17], 19[18]）等を意味している[9]。新約聖書においてエイレーネーは、七十人訳の用例と同様にヘブライ語シャロームの持つ多義的な語義を反映して、戦争（πόλεμος）の反対概念として争いがないことを意味するだけでなく、「平安」や「繁栄」の意味にもなる（マコ 5:34; ルカ 7:50; 8:48; 10:5; 24:36; ヨハ 20:19, 21, 26; ヤコ 2:16）[10]。ルカによる福音書における平和に関する発言を検討するにあたっては、エイレーネーの多義性を念頭において、それぞれでの文脈における意味を慎重に検討する必要がある。

イエスが地上に平和をもたらす救い主であることは、ルカ福音書が伝える降誕物語において既に告げられ、平和が第四福音書全体を貫く重要主題であることを示している（ルカ 1:78-79; 2:11, 14, 29-32）。洗礼者ヨハネの父ゼカリアはヨハネの誕生に際して聖霊に満たされて神を讃える預言の言葉を語っている（1:67-79）。ゼカリアの頌歌はイエスの誕生について、「（主は）民を訪れて贖いをなし、私たちのために救いの角をその僕ダビデの家に起こした」と語った。この頌歌の比喩的表現によれば、イエスは「高いところからの曙光」であり、「闇と死の陰に住む者を照らし、私たちの足を平和の道へと向かわせる」こととなる（ルカ 1:78-79; イザヤ 9:2 を参照）。ベツレヘムにおける幼子イエスの誕生は、旧約聖書においてイザヤが語った平和の王の預言の成就とも言うべき出来事と解釈されている（イザ 9:5-6; 11:1-10 を参照）。

イエスの両親のベツレヘムへの旅は、初代皇帝アウグストゥスの人口調査の勅令に端を発したように描かれている（ルカ 2:1）。ローマ帝国は圧倒的な武力により敵対勢力を平定することを通して、ローマ人が考える平和な世界秩序を樹立していた（アウグストゥス『業績録』12,13; タキトゥス『年代記』1.4.1; リヴィウス『ローマ建国史』1.31.7; 3.2.2; 5.27.15; オヴィウス『変身物語』15.832 他）[11]。当時の地中海世界を支配する「ローマの平和」とイエスが体現する神の国の平和との対照は、ルカ文書の底流に流れる隠れた重要主題となっている[12]。

イエスの誕生物語において、ベツレヘムの郊外で羊の群れの番をしていた羊飼いたちに、救い主誕生を告げる告知がなされた後に（ルカ 2:11）、天使の大軍が出現し、「栄光がいと高きところで神に、地上では御心にかなう者の間に平和（があるように）」と唱和している（ルカ 2:14）。救い主として生まれる神の子キリストの生涯が、神に栄光を顕し、御心に適う者に平和を与えるものとなることが、この頌栄句によって先取り的に述べられることとなる。

イエスは長じて宣教者としての生涯を開始し、ガリラヤにおいて神の国の福音を語った（ルカ 4:43; 8:1; 18:29; 21:31 他）[13]。人を愛することを勧めるイエスの教えは（ルカ 6:27-38; 10:25-37）、人と人が争うことがなく、互いに赦し合って生きる平和な世界の実現に寄与するものとなる。こうした非暴力的な手段による平和の実現は、軍事力による征服や威嚇に支えられた「ローマの平和（Pax Romana）」の対極にある[14]。

地上で実現される神の国の平和のイメージは、ナザレの会堂でイエスが朗読したイザヤ 61:1-2 によって、様々な圧迫や拘束や苦難からの解放の時として表現されている（ルカ 4:18-19）[15]。イエスは奇跡物語において癒やされた人に対して繰り返し、「あなたの信仰があなたを救った。平安の内に行きなさい」と語っている（7:50; 8:48）。病の苦しみからの解放は、癒やされた人が平安の内に生きることを可能にしたからである。この場合の「平安（εἰρήνη）」とは病との戦いからの解放を意味すると共に心理的な「安心」や「安息」を内包している。

さらに、主によって世に遣わされた弟子たちは託された宣教活動を通して、人々に神の国の平和をもたらす務めを帯びていた。彼らは宣教活動においてどこかの家に入ったら、まずその家に住む

者たちに平和を祈り求めるように指示されていた（ルカ 10:5-6; さらに、マタ 10:12 を参照）。その家に彼らが告知した平和を受け入れる「平和の子」がいる場合はその家に留まるが、受け入れる者がいない場合は彼らに戻ってくるとされている（ルカ 10:6 さらに、マタ 10:13 を参照）。この事態は、誕生物語において天使の群れによって歌われた地の平和が「御心に適う者」に限定されていることに対応している（ルカ 2:14 を参照）。

イエスの語録資料（Q）に由来するルカ 12:51-53 は（並行箇所のマタ 10:34-36 を参照）、イエスの到来が信徒の家庭に平和でなく、分裂を招くことを告げている[16]。この語録の内容は、イエスに従う者が社会の少数者であった時代に、イエスとその教えを受け入れるかどうかで親子が対立し、宗教的信条に関して家族が分裂する可能性があったことを反映している。

イエスの一行がエルサレムに近づき、オリブ山を下るあたりで弟子の群れが神を讃美して、「祝福されている、主の御名によって来たる王は。天に平和、そして栄光がいと高きところに」と歌ったとされている（ルカ 19:38; 詩 118[117]:26 を参照）。この讃歌は王なるキリストの受難と復活に向かう歩みが、天における平和と神の栄光を顕すものとなることを示唆している。ファリサイ派の一部は入城するイエスにメシアの到来を見て讃美するこの言葉に躓いて、群衆の中から叫んで讃歌を捧げる弟子たちを叱るように求めるが、イエスは、「あなた方に言っておくが、この者たちが黙れるとすれば、石が叫ぶだろう」と答えて彼らの主張を斥ける（ルカ 19:39-40）。イエスは苦難を通して神の救いの計画を成就し、神の子の栄光に入ることになることについては、後に受難・復活物語において復活者が旧約聖書のキリスト論的解釈によって主張することとなる（ルカ 24:25-26 を参照）[17]。

ガリラヤからエルサレムへの旅が終わりに近づき、都が視界に入って来た時にイエスはエルサレムのために嘆きながら、「この日にお前が平和の事柄を知っていれば（良いのだが）、それはお前の目から隠されている」と述べている（ルカ 19:42）。ここで「平和の事柄」とは平和の主であるイエスの到来のことであろう。エルサレムの指導者たちは、平和の主であるイエスを受け入れず、一連の論争を仕掛けた後に（20:1-8, 20-26, 27-40）、身柄を拘束し（22:54-65）、裁判に掛けて断罪し（22:66-71）、さらにはローマ総督に訴えてイエスへの死刑判決とその執行を得ることになる（23:1-5, 13-49）。そのために、後のユダヤ戦争の時に、エルサレムはローマ軍により包囲されて攻略され、破壊されてしまうことが予告されている（19:43-44; 21:20-24）。イエスがもたらす平和を地上において享受することは、ここでも福音を受け入れる者に限定されている。

ルカが伝える受難・復活物語によれば、死後三日目に甦った復活の主はエルサレムで夕刻に弟子たちの前に姿を現した時に、「あなた方に平和があるように」という挨拶の言葉を語っている（24:36）。この平和の挨拶は、イエスの逮捕と処刑の際に逃亡し、不安と恐怖の中にあった弟子たちに心理的な安心を与えるものである。弟子たちがイエスのエルサレム入城の際に祈願した「天における平和」は、復活の主によって彼らに分与されることとなった。彼らは当初は亡霊を見ていると思って恐れたが、まもなく主が復活して生きていると知って、喜びに溢れている（20:37-43）。

使徒言行録においては、政治的・社会的次元での平和の主題と、福音を通して得られる霊的平和の主題が交錯して出て来る。最高法院における弁明演説において、ステファノはイスラエルの歴史の回顧の中で（使 7:2-53）、奴隷の地エジプトでのユダヤ人同士の争いを諌めて和解させようとする（εἰς εἰρήνην）モーセの試みに言及する（7:26）。

カイサリアに駐屯する百人隊長コルネリウス一家の回心の出来事においてペトロは、「神を畏れ、義を行う者」はユダヤ人でなくとも神に受け入れられることを説く説教の中で（10:34-43）、福音宣教の言葉を「イエスによってイスラエルの子らに対して宣べ伝えられた平和」と形容している（使 10:36）。この「平和」とは、言葉を受け入れ

る者に罪の赦しを与え神と人との和解をもたらすことを指していると考えられる（10:43）。

ステファノの殉教の後にエルサレムでは教会に対して激しい迫害が加えられたために、信徒たちはサマリアやシリア等の周辺地域に散らされて行った（使 8:1b）。彼らは散らされて行った先々で福音を伝えたので、キリスト教信仰が周辺地域に広がる結果となった（9:4-40; 11:19-26）。ヘレニストたちへのユダヤ人当局による迫害の状況は変わらなかったが、そのことによってキリスト教が根絶されることなく、「教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、建て上げられ、主を畏れて歩み、聖霊の励ましによって数を増した」とされている（9:31）。ここで言う教会の「平和」とは、信徒相互の間に対立がなく、教会が一致団結しており、分裂がないことを指すであろう。後に、初代教会は異邦人信徒を受け入れることになるが（使 10:1-48; 11:1-18, 19-26）、後に彼らにユダヤ人信徒と同様に律法の遵守を求めるかどうかでは意見の相違が生じ、激しい論争となった（15:1-2）。しかし、使徒会議の結果、異邦人信徒が割礼を受けて律法を遵守する必要はないという結論になり、教会の分裂は回避された（15:6-35）。

使 16 章はパウロのフィリピ宣教の記事であるが、後半部はパウロとシラスが投獄された顛末を伝えている。高官たちが下役たちによって伝えた釈放の命令により、看守がパウロらを釈放するときに、「さあ出獄し、平安のうちに行きなさい」と述べている（16:36）。「平安（εἰρήνη）」とは、ここでは外的な拘束から解放された自由な身の状態のことを指している。尚、この看守とその家族は真夜中にパウロの言葉を聞いて回心し、パウロから洗礼を受けており（16:31-34）、パウロらに好意を持っていたと推測される。

使 24:2 ではローマ総督フェリクスの前で大祭司の立場を代弁してパウロを告発する弁論家テルティロの言葉の中に、ローマによって与えられた政治的・社会的秩序を「平和（εἰρήνη）」と称して誉め称える場面が描かれている[18]。こうした発言の背景には、軍事力による征服や威嚇に支えられた「ローマの平和（Pax Romana）」の存在がある。法廷での弁論に長けたテルティロはローマ支配下の世界を平和であるとして褒め上げることで、裁判長の役を務めている総督フェリクスの心証を良くし、自分たちに有利な判決を得ようとしたのであった[19]。

4. ルカ 2:14 と 19:38 の釈義的分析

4.1 ルカ 2:14

この箇所はルカ 2:1-21 にあるイエスの誕生物語の中に置かれている。誕生物語は人口調査を命じる皇帝アウグストゥスの勅令から始まり（2:1-3）、ヨセフとマリアのベツレヘムへの旅（2:4-5）、イエスの誕生へと続く（2:6-7）。エルサレムの郊外で夜に羊の番をしていた羊飼いたちへ天使が現れ、救い主誕生の知らせを伝える（2:8-12）。その直後に天使の大軍が現れて神を讃える讃歌を歌う（2:13-14）。羊飼いたちは天使のお告げに従ってベツレヘムの町へ行き、幼子を捜し当て、天使によって告げられた通りであることを確認し、神に栄光を帰し、神を讃美しながら帰って行った（2:15-16）。この一連の出来事の流れにおいて、天使の大軍が捧げる讃歌は、少し前に書かれている救い主誕生を告げる天使のお告げを契機に捧げられているので、このお告げとの関連を考える必要がある。お告げの言葉は次の通りである。

> μὴ φοβεῖσθέ, ἰδοὺ γὰρ εὐαγγελίζομαι ὑμῖν χαρὰν μεγάλην ἥτις ἔσται παντὶ τῷ λαῷ, ὅτι ἐτέχθη ὑμῖν σήμερον σωτὴρ ὅς ἐστιν χριστὸς κύριος ἐν πόλει Δαυίδ
>
> （「恐れるな。見よ、あなたがたに民全体のものとなる大きな喜びを告げる。今日、私たちのためにダビデの町に救い主が生まれた。その方はキリストなる主である」）（ルカ 2:10-11）。

この言葉は文体的には、ゼカリアや（1:13-17）、マリアに（1:30-33）対して語られた受胎告知に相似している。天使の言葉は、「恐れるな」とい

う常套句によって導入され（2:10）、ダビデの町での救い主誕生という知らせと（2:11）、飼い葉桶に寝かせられている幼子という識別のしるし（2:12）を内容としている。この告知は場面の中では羊飼いたちに語られているが、イエス誕生の出来事の意味を読者に説き明かす機能を果たしている。

天使の大軍が突然出現して神を讃えたことは（ルカ 2:13-14）、物語の場面に急に天上の礼拝のモチーフを持ち込んでいる[20]。ルカ 2:14 の讃歌の内容は下記の通りである。

> δόξα ἐν ὑψίστοις θεῷ
> καὶ ἐπὶ γῆς εἰρήνη ἐν ἀνθρώποις εὐδοκίας
> （「栄光がいと高きところで神に
> 地上では平和が御心にかなう者の間に」）（ルカ 2:14）。

この文章は典礼的な祈願文で動詞が省略されている[21]。本節は二部構成をとっており、天上における神の栄光を祈る前半（2:14a）と、地上において御心に適う者に平和が与えられることを祈る後半（2:14b）とが緩やかな交差配列を形成している[22]。天使の大軍の讃美は地上にいる羊飼いの眼前で行われたので、彼らを介して地上にいる人間全体に開かれたものとなっている。この天上から響きわたった讃美の言葉への応答は、ずっと後でイエスのエルサレム入城の際に弟子たちが唱和した讃美の言葉によってなされることになる（19:38 を参照）。

本節前半に出て来る神の栄光は、旧約聖書に出て来る讃歌の中に見られ（詩 19[18]:2; 57[56]:6,12; 104[103]:31; 138[137]:5; イザ 24:23; 60:2 他多数）、詩編 24 編では神が「栄光の王」と呼ばれている（詩 24[23]:7,8,9,10）。神の栄光の主題は、初期ユダヤ教文献に使用される頌栄句に継承されている（バル 2:17-18; IV マカ 1:12; ソロ詩 18:10;『感謝の詩編（1QH）』5.20; 7.5;『賢人の歌（4QShir = 4Q511）』1.9 他）。さらに、新約聖書ではパウロ書簡や（ロマ 11:36; 16:27）ヘブライ書が（ヘブ 13:21）、神に栄光を帰す頌栄句を引用している。また、天上の礼拝の場面は黙示録にしばしば出て来ており、そこでは天使たちが神や神の小羊の力や栄光を讃美している（黙 5:12,13; 7:12; 12:10; 19:1,6-8）。

本節後半（2:14b）のような典礼的文章における平和の主題への言及は、旧約聖書の民数記に出て来るアロンの祝祷に見られ、会衆に対して神が平和を与えることが祈り求められている（民 6:26）。イスラエルの民に平和が与えられることは、詩編や預言書においても祈り求められている（詩 29[28]:11; 85[84]:8; 119[118]:165; 122[121]:6,7,8; 125[124]:5; 128[127]:6; イザ 26:3; エレ 16:5; エゼ 34:25 他）。同様に、死海写本の祈祷文にも平和を祈願する句が見られる（『日々の祈り（4QpapPrQuot = 4Q503）』frag.29-32.1, 11; frag.48-50.2 を参照）[23]。会衆に恵みと平和を祈る主題は、初期ユダヤ教書簡や初期キリスト教書簡冒頭の頌栄句に継承されている。例えば、エジプト在住のユダヤ人共同体へ宛てたディアスポラ書簡である II マカバイ記では、著者の大祭司が冒頭で読者のユダヤ人共同体に対して平和を祈り求めている（II マカ 1:1）。初期キリスト教書簡では、パウロが読者である教会に対して書簡冒頭で「父なる神と主イエス・キリストから恵みと平和があるように」と祈り求めている（ロマ 1:7; I コリ 1:3; II コリ 1:2; フィリ 1:2; フィレ 3; I テサ 1:1）。第二パウロ書簡や（エフェ 1:2; コロ 1:2; II テサ 1:2）ペトロ書簡でも（I ペト 1:2; II ペト 1:2）、同様な定型句が書簡冒頭に使用されている。これらの事情は、初代教会の人々が、平和の源が神であり、平和はローマ皇帝ではなく栄光の神が与えるものであると理解していたことを示している[24]。

4.1 ルカ 19:38

イエスのエルサレム入城に際して、オリブ山に一行が差し掛かった時に弟子の群れがこぞってイエスと神を讃えて次の頌栄句を唱和している（ルカ 19:38; 詩 118[117]:26 を参照）。

εὐλογημένος ὁ ἐρχόμενος ὁ βασιλεὺς ἐν ὀνόματι κυριοῦ· ἐν οὐρανῷ εἰρήνη καὶ δόξα ἐν τοῖς ὑψίστοις
（「祝福されている、主の御名において来る王は。天に平和そして栄光がいと高きところに」）

この讃歌は典礼的な祈願文の文体で書かれており、主動詞が省略されている。文の前半は「主の御名において来る王」と呼ばれるイエスを讃美している。神を讃美する句ではεὐλογητός（讃むべき、祝福されている）という形容詞表現を使用する場合が多いが（ルカ 1:68; ロマ 1:25; 9:5; II コリ 1:3; 11:31; エフェ 1:3; I ペト 1:3）、ここでは分詞のεὐλογημένος（祝福されている）が使用されている（マタ 21:9; 25:34; マコ 11:9; ルカ 1:42; 13:35; ヨハ 12:13 他を参照）。尚、この発言内容はルカによる福音書の物語では、エルサレムへ向かう途上のイエス自身によって先取り的に述べられた言葉を成就するものとなっている（ルカ 13:35 を参照）。

福音書記者ルカはマルコ福音書を介して詩 118[117]:26 LXX を引用していると考えられる（マコ 11:9 を参照）[25]。ルカはマルコ原本にὁ βασιλεύς（「王」）という句を付加する一方で、εὐλογημένη ἡ ἐρχομένη βασιλεία τοῦ πατρὸς ἡμῶν Δαυίδ. ὡσαννὰ ἐν τοῖς ὑψίστοις.（「祝福されている、来たるべき私たちの父ダビデの国。いと高きところにホサナ」）という部分を削除し、ἐν οὐρανῷ εἰρήνη καὶ δόξα ἐν τοῖς ὑψίστοις（「天に平和そして栄光がいと高きところに」）という交差配列の形式の句に置き換えている[26]。

この讃歌の後半部分（19:38cd）は、降誕物語の際に天の軍勢が歌った讃歌に答える応答唱として機能しているが、より簡潔な表現となっている。この部分は、マルコ原本に変更を加えた編集句であり（マコ 11:10 を参照）、ルカ 2:14 の頌栄句との明確な対応を作り出している[27]。ルカ 2:14 では天使の大軍が天上からやって来て、高いところから神に栄光を帰し、地上の「御心に適う者たち」に平和を祈願する歌を響かせている。ルカ 19:38 ではイエスに従う弟子たちの群れがオリブ山を降りながら、こぞって天の平和と神の栄光を大きな声で讃えている。19:38 に登場する弟子たちの群れは、2:14 の「御心に適う者たち」に相当している。彼らは 2:14 で祈願されている平和を付与される者として、天上における平和と栄光を祈願している。彼らの讃美は直接にはイエスが行った「力ある業を見た」ことに端を発している（19:37 を参照）。イエスが行った奇跡行為の内に神の力の発現を見て、彼らは天の神に栄光と平和を帰している。ここでの眼差しは天の神が有する栄光と平和に向けられている[28]。キリストがその生涯を通して成就することになる平和は、天と地を貫く神の平和に他ならないからである[29]。

天における平和が語られることは聖書において稀であるが、ルカによる福音書の物語では、イエスが先に宣教派遣から帰って来た弟子たちに対して、「サタンが稲妻のように天から落ちるのを見た」と語っており（10:19）、天において悪の力が排除され、平和が樹立されていることが示唆されている。他方、「平和の神」という表現が定型句としてパウロ書簡その他の結びの句の中で使用される例は多く（ロマ 15:33; 16:20; II コリ 13:11; フィリ 4:9; さらに、ヘブ 13:20 も参照）、民に平和を与えることが重要な神の属性の一つと理解されていた。

死海写本には、「神の平和（שלום אל）」（『戦いの書（1QM）』3.5; 4.12,14）や「あなたの平和（שלומכה）」（『戦いの書（1QM）』12.3）という表現が見られ、敵対する闇の勢力を克服する平和の起源が神にあるという理解を示している。ユダヤ教の祈祷文であるカディシュの第二八祈願は、「天からの平和が豊かにあるように」となっており、天来の平和の到来を祈り求めている[30]。また、ユダヤ教の定型的祈祷文であるアミダー（シェモネー・エスレー）の第一九祈願は平和を主たる主題としているのでビルカト・シャロームと呼ばれる[31]。この祈願は次のような文言となっている。

「平和と善と祝福、恵みと愛と憐れみとをわれ

らの上に、またあなたの民イスラエルのすべての上に、うち立て給え。あなたの御顔の光をもってわれらをみな一様に。

なぜならあなたの御顔の光をもってわれらの神、主よ、あなたはわれらに生命のトーラーを、真実の愛を、そして義と祝福と憐れみと生命と平和を給いし故に。

また、あなたの民イスラエルをあなたの平和をもってすべての時、すべての折りに祝福し給うことがあなたの目に良いことでありますように。
主なるあなたは讃むべきかな、あなたの民イスラエルを平和をもって祝福し給う方よ。」[32]

この祈願は神が命と義と善と平和の源であることを前提に、イスラエルの上に平和と祝福が与えられるように繰り返し願い求め、連祷全体を締め括っている[33]。ルカ 19:38 に登場する天上の平和の主題は、ユダヤ教の祈祷文が強調する天来の平和の主題の前提となるものである。イエスは受難と死と復活によって、この世を支配する死と罪の力に勝利し、神の栄光と平和を顕すことになるのである。

5. 結論

天に平和と栄光があるように祈るルカ 19:38 の頌栄句は、天に栄光と地において御心に適う者たちに平和が与えられることを祈る 2:14 と対応する形で挿入されており、そこにははっきりした編集的意図がある。両者は典礼的な讃歌であり、2:14 では天使の群れにより天上から告げられるが、19:38 では地上でイエスの弟子たちの群れが唱える応答唱として歌われている。栄光と平和のテーマは、ルカ福音書の初めと（2:14）後半部に（19:38）出て来ることによって、この物語全体を囲い込む構造となっている。天における栄光ということは両者に共通である。平和に関しては 2:14 が地上の平和を願い、19:38 は天上の平和を祈り求めている違いがあるが、両者の間に矛盾はない。天における平和と地上の平和とは相互に相関した主題であり、天上の平和の確立は地上の平和の実現の前提である。イエスは十字架の死と復活によって、この世を支配する死と罪の力に勝利し、神の栄光と平和を天上・地上に顕すことになるのである。

修辞的な視点からすると、ルカ 2:14 と 19:38 の讃歌には演示的要素が強い。演示演説はしばしば祝祭演説や追悼演説として公の式典において行われ、美徳や悪徳を数え上げることを通して共同体が拠って立つ基本的価値観を再確認する社会的機能を持っている（アリストテレス『弁論術』1358b; 偽キケロ『ヘレンニウスに与える修辞学書』1.2; クウィンティリアヌス『弁論家の教育』3.7.28）[34]。ルカ 2:14 において天使の大軍の讃歌が天上から唱える神の栄光と地上の平和、また、19:38 においてイエスの弟子たちが祈り求める神の栄光と天上の平和とは、イスラエルの民、ひいては、世界の民が求める究極の価値であり、メシアであるイエスの誕生とエルサレム入城に際して改めて確認する必要があった。イエスの受難と死と復活を通して神の栄光と天上・地上の平和が顕わされることになるからである。

注

1　H. Baarlink, “Die lukanische Redaktion von Lk 19,38 und ihre Deutung,” *ZNW* 76 (1985) 170-186.
2　Ibid., 175-176.
3　Ibid., 177-178, 181-182;　尚、E. Schweizer, *Das Evangelium nach Lukas* (Göttingen: Vandenheock & Ruprecht, 1982) 34; H. Frankemölle, *Friede und Schwert. Frieden schaffen nach dem Neuen Testament* (Mainz: Matthias Grünewalt, 1983) 46; J. Lambrecht, “Peace on Earth or Peace in Heaven (Luke 2,14 and 19,38),” (in idem., *Understanding What One Reads: New Testament Essays*; Lueven: Peeters, 2003) 109-110; H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK I/3; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2006) 616-617 も同様な解釈をとっている。
4　Baarlink, 179-181.
5　G. Klein, “Eschatologie und Schöpfung bei Lukas:

eine kosmische Liturgie im dritten Evangelium," in *Eschatologie und Schöpfung* (FS. Erich Gräßer; hrsg. v. M. Evang, H. Merklein und M. Wolter; Berlin: de Gruyter, 1997) 145-154.

6 Ibid.,148-151.

7 Ibid.,151.

8 Ibid.,152.

9 W. Foerster, "εἰρήνη in der LXX," *TWNT* 2.406-8; E. Dinkler, "Friede," *RAC* 8.454-455 を参照。

10 Bauer-Aland, 457-459; W. Foerster, "εἰρήνη im NT," *TWNT* 2.406-8; V. Hasler, "εἰρήνη," *EWNT* 1.957-964; W. M. Swartley, "Peace in the NT," *NIDB* 4.422; O. Schnübbe, *Der Friede (shalom) im Alten und Neuen Testament – eine notwendige Korrektur* (Hannover: Lutherisches Verlagshaus, 1992) 28-29 を参照。

11 「ローマの平和」の政治的・軍事的性格について詳しくは、E. Dinkler, "Friede," *RAC* 8. 442-444; K.Wengst, *Pax Romana and the Peace of Jesus Christ* (London: SCM, 1987) 7-54; Schnübbe, 14-17; A. Janzen, *Der Friede im lukanischen Doppelwerk vor dem Hintergrund der Pax Romana* (New York: Peter Lang, 2002) 35-70, 97-131, 165-196; M. Reasoner, "Paul's God of Peace in Canonical and Political Perspectives," in *The History of Religions School Today* (eds. T. R. Blanton IV / R. M. Calhoun / C. K. Rothschild; WUNT 340; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2014) 15-17 を参照。

12 H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK I/3; Gttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2006) 139.

13 使徒言行録において、イエスはガリラヤにおける宣教活動を通して人々の間で「平和の福音」を語ったと総括される（使 10:36）。

14 Janzen, 76-78; A. Strobel, "Die Friedenshaltung Jesu im Zeugnis der Evangelien - christliches Ideal oder christliches Kriterium?" *ZEE* 17 (1973) 97-106; R. E. Brown, *The Birth of the Messiah* (Garden City, NY: Doubleday, 1977) 415; J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke* (Vol.2; AB28; New York: Doubleday, 1981) 394; F. Bovon, *Lukasevangelium* (Teilband 1; EKK III/1; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989) 117-118.

15 Janzen, 132-138.

16 マタ 10:34 ではイエスが、「平和でなく、剣をもたらすために来た」と述べたとされている。

17 F. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke X-XXIV* (Vol.2; AB28A; New York: Doubleday, 1985) 1251; U. Mauser, *The Gospel of Peace: A Scriptural Message for Today's World* (Louisville, KT: Westminster / John Knox, 1992) 49; J. Nolland, *Luke* (Vol. 2; WBC 35C; Dallas: Word Books, 1993) 927; D. L. Bock, *Luke* (Vol. 2; Grand Rapids: Baker, 1996) 1558-1559; F. Bovon, *Lukasevangelium* (Teilband 4; EKK III/4; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2009) 33-34 を参照。

18 Janzen, 30 もこの点に注目する。

19 原口尚彰『ロゴス・エートス・パトス』新教出版社、2005 年、223 頁を参照。

20 Bovon, 1.127-128; J. Nolland, *Luke* (Vol. 1; WBC 35C; Dallas: Word Books, 1993) 927; D. L. Bock, *Luke* (Vol. 1; Grand Rapids: Baker, 1994) 220, 228-229 を参照。尚、G. Klein, 149-151 は、このことによって物語が天と地を包含する「宇宙的次元」で展開されているとする。

21 この文章が平叙文であるとして ἐστιν を補う H. Schürmann, *Das Evangelium nach Lukas* (HTKNT III/1; Freiburg: Herder, 1984) 113; W. Wiefel, *Das Evangelium nach Lukas* (THNT 3; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1988) 73 の解釈には賛成できない。

22 Schürmann, 1.113; Schweizer, 34; Fitzmyer, I 411; Bovon, 1.128; H. Klein, 137; Lambrecht, 108.

23 B. Nitzan, *Qumran Prayer and Religious Poetry* (trans. J. Chipman; Leiden: Brill, 1994) 70 を参照。

24 H. Klein, 139.

25 M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HBNT 5; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2008) 631; H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK I/3; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2006) 616.

26 Fitzmyer, 2.1251; Wolter, 631; Bovon, 4.29.

27 G. Klein, 146-147; H. Klein, 613-614; Lambrecht, 107; W. Wiefel, *Das Evangelium nach Lukas* (THNT 3; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1988) 334.

28 Wolter, 631 もそのことに注目している。

29 Bovon, 4.34 は、この箇所ではエフェ 2:24-18 同様に宇宙的規模での平和が語られているとする。

30 "Kaddish," *Wikipedia* (https://en.wikipedia.org/eiki/kaddish 2018 年 7 月 10 日に閲覧); "Kaddish," *EJ* 11 (2007) 695.

31 長窪専三「十八祈祷文」『古典ユダヤ教事典』240-241 頁、「ビルカト・シャローム」同 412 頁。

32 この祈願の日本語訳は、蛭沼寿雄他編『原典新約時代史』山本書店、1976 年、552 頁より引用している。

33 "Amidah," *EJ* 2 (2007) 74 を参照。

34　G. A. Kennedy, *New Testament Interpretation through Rhetorical Criticism* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1984) 74-75.

Peace on Earth or Peace in Heaven? The Doxologies in Luke 2:14 & 19:38

Takaaki Haraguchi

Luke 19:38 is intentionally inserted in correspondence to 2:14 by the author of the third Gospel. There is no disagreement between the two doxological passages. Both of them are liturgical songs of praise. The praise in Luke 2:14 is offered by an angelic host in heaven, while Luke 19:38 is a liturgical response to 2:14, sung by a large group of Jesus' disciples. The theme of the glory of God is common to the two phrases. However, peace on earth is declared in 2:14, while peace in heaven is prayed for in 19:38. Each theme is interrelated with the other, for peace in heaven is a prerequisite for the realization of peace on earth. Jesus' victory over the power of sin and death by his death on the Cross and the subsequent resurrection, constitutes the decisive event of revealing heavenly peace on earth.

Keywords: Luke, glory, peace, heaven, earth